

■学位論文内容要旨

## 保育者と子どもの関係における保育者のあり方に関する研究 ——アタッチメント理論に着目して——

井上 美子 (2023年度修了)

保育の質には「構造の質」、「プロセスの質」という二つの側面がある。近年問題視されている「不適切な保育」は、先行研究やマスメディアが取り上げるように、我が国における保育の規制緩和による「構造の質」の低下による歪が大きな原因がある。一方で「プロセスの質」もこの「構造の質」と絡み合いながら、同じようにその質の低下によって「不適切な保育」を生じさせたおそれがある。その上で、プロセスの質に含まれる多くの要因のひとつに保育者と子どものやりとりがあり、これを原初的な保育者と子どもの関係構築と考え「不適切な保育」事例を概観すると、その関係の不全が明らかになった。

わが国の保育所保育指針・幼稚園教育要領等にも示されているように、保育者と子どもの関係の構築は保育の基礎である。しかしながら、日本における保育者の社会的評価の低さに対し、実践を支える保育者の理論の不足と指摘されるように、「不適切な保育」は保育を支える理論の不足によって、保育者と子どもとの関係を不全に陥らせたのではと懸念する。この理論不足を解消する手段として、イギリスの精神分析学者であるボウルビーが提唱した、アタッチメント理論が、保育の質を向上させる一つの鍵となり得ると考えた。

したがって本論は、アタッチメント理論の視点から、保育者と子どもの関係における保育者のあり方を明らかにし、保育の質の向上に寄与しようとする研究である。

アタッチメント理論は、ボウルビーが人の幼少期の不幸を問題の根源と考え、その時期の母子の離別が重要だとして、乳幼児期の養育者との関係性が将来の個性形成に影響を与えると主張した。この母子関係を重視した論調が賛否を生むことになる。1970年代のアメリカでは女性の働く家庭が増え、保育を利用することが一般化した。このことにより保育による母子の分離が発達に影響

を与えるのではないかと、特に母子再会後の「回避的アタッチメント」の増加が議論された。しかし、それに関連する長期縦断研究では、母親と他者による保育にほとんど差がないことが結論として明らかになっている。

アタッチメント理論は、1976年に日本ですでに用いられていた「愛着」という言葉が、「Attachment」の訳語として用いられ邦訳された。しかし、欧米との文化差も影響し、母子関係の考え方の違いからか、日本ではアタッチメント理論の研究や議論が少なかった。また、3歳以下の母子分離が発達に与えるとする巷間の言説「三歳児神話」の影響で、日本ではこの理論への独特な受け止め方を生んだ。

言説の背景である1960年代から70年代の日本は経済成長期で、これにより「三歳児神話」における子育て期間、母親は家庭で過ごすべきという考えが広まった。従って保育者も代替愛着対象者として認められるという傾向にあった。

しかし、この考え方は性別役割を固定化し、働く母親に対する社会的圧力を高め、育児と仕事の両立を模索する母親たちに負担を与えた。欧米では母親に限定しない多様な子育ての議論が行われ、一方日本では母親不在が乳幼児の発達に影響を与えるという視点が強調されたのである。

この背景からボウルビーのアタッチメント（愛着）理論は、子どもの情愛的な結びつきを強調し、母子関係が人格の発達に与える影響として、「三歳児神話」の母性観に基づいた素朴理論によって科学的知見として受け入れられていったのである。しかしこの「愛着」という訳語についてアタッチメントの本来の意味から乖離して捉えられる懸念があり、近年再検討が行われている。

アタッチメント理論は端的に言えば、生物が恐れや不

安から逃れるために近接を求めるメカニズムである。特に人間の子どもは、特定の他者に身体的・精神的な近接 (Attach) することが重要で、このアタッチメント行動を通じてもたらせられる他者からのケアギバー行動によって、子どもは信頼感を得て安心し、他者に受け入れられる確信を持つのである。しかし、不安や恐れが適切に制御されない場合が長期間続くと、心理的な影響だけでなく生理学的なストレスにも影響する。

また、生後早期のヒトの新生児は未熟であり、その脆弱性から養育者の役割が極めて重要であり、負担も重い。そのため親を含むさまざまなオトナからの養育が必要となり、母親以外による子育ての重要性が示唆される。したがって進化的見地から、子どもは他者のケアを受け入れ、大人たちは子どもに対してケアを提供する。すなわち、保育者や他の大人との関係が子どもの健全な成長に重要な役割を果たし、家庭と保育の場で行われる子どものアタッチメント行動に対するケアギバー行動が、アタッチメントの形成に寄与する可能性が考えられる。

現在では臨床現場でのアタッチメント理論の活用が進んでおり、アタッチメント理論は臨床での治療や介入においても有用であり、子どもの健全な成長と発達に対して重要な視点を提供している。このアタッチメント理論を活用したアプローチは、まさに保育そのものを言い得ている。

先述したが日本においては、保育の現場では保育者は親のアタッチメントの補完及び代替とされている。しかし、親とは異なり保育者の役割としては、すべての子どもに対して適切なケアを提供することが重要である。保育者のアタッチメントに関する研究では、母子のアタッチメントとは異なる側面があり、保育者は子どもにとって異なるアタッチメント対象と見なされることも議論されている。

Ahnertら (2006) は、先行研究のメタ分析を行い、保育者と子どものアタッチメントを調査し、母親へのア

タッチメントが安定している子どもでも、保育者への安定したアタッチメントを持つ子どもがいることを示唆した。

しかし、母子関係と保育者・子の関係のそれは相関が弱く、子どもは母親から独立して保育者とのアタッチメントを形成していると考えられる。つまり、乳幼児期の親との関係が子どもの他者との関係を直接規定するわけではなく、子どもは個別の相手との相互作用を通じてそれぞれの関係の質を構築しているということである。

さらにAhnertらは、米国の家庭保育とセンター保育における保育者の感性に言及した。結果として、家庭保育では子どもと保育者のアタッチメントは母子関係と同じく個々の関係の「二者関係の感性」と関連していたが、センター保育では集団全体の「集団的感性」と関連があった。これらことから、保育者は母親の代替ではなく、個別のアタッチメント対象者であり、保育者と子どものアタッチメントは母子間のアタッチメントとは独立して形成される可能性が示唆されたのである。

新入園時の母子分離は子どものころにとって重要な出来事で、アタッチメント理論を活用することで保育者は子どもたちに安心感を提供し、母子関係とは異なる独自の関係を構築できる。また保育者とのアタッチメントは、学校の担任との関係に影響を与える知見もある。つまり子どもにとって初めての「せんせい」である保育者は、アタッチメントによって「先生」への懸け橋になる可能性が示唆された。

これらのことから、子どもたちのひとつひとつの行動は、原初的なアタッチメントとして、ころ・からだの成長に関わるという理論を、保育者のあり方として銘記する必要があるだろう。

## 謝辞

5年に渡る修論のご指導をいただいた三山岳先生には、深く感謝申し上げます。